

し天気と関係をつけるなら、水温が上って、酸素が水中に少なくなれば、表面に出て口をパクパクやるでしょう。しかし日中太陽光線があたっているときは、藻などがあれば炭素同化作用をやっていますから、酸素は水中にかえって豊富です。この魚が表面に出てパクパクやるのを養魚家は「鼻上げ」と称していますが、よく、早朝におこります。それは夜に藻や植物性プランクトンが呼吸作用をするため、水中の酸素が夜明け頃、最低になるからです。このとき風がありますと、すこししか「鼻上げ」がおこりません。ウナギの養魚池などでは、水車を電気で動かして水に空中の酸素をいれてやっています。

魚の「浮く」といわれるのが、もし「鼻上げ」であるのなら、天気との関係は、むしろ、温度と風力に関係があって、気圧ではないと思います。ただし、この「池の魚の浅いところにいる」というのが、「鼻上げ」であるか否かは、この文章ではわかりません。筆者が魚のいる深さより行動にもっと注意をして下さるとわかります。要は、魚を物理学的に考えるのではなく、もっと生物学的に考え、そして天気との関係を考えられたら、もっと面白いことだろうと思います。

桧山 義夫

〔新刊紹介〕

木沢 綏・飯田睦治郎・松山 資郎・宮脇 昭 共著

富士山——自然の謎を解く——

NHK ブックス 91, B 6 版 253 頁

富士山については、これまでにいろいろな角度から、科学的な研究が進められてきた。本書は、これらの数多くの研究成果を集大成し、一般向けの教養書として読みやすくまとめられている。

著者の顔ぶれから推察できるとおり、内容は富士山の地形・地質（木沢）、気象（飯田）、動物（松山）、植物（宮脇）の四つの部分から成り立っている。ちなみに気象の部分を見ると、富士山の四季、標高と気圧・気温・湿度の章で、富士山頂での多年にわたる気象観測資料をもとにして富士山の気候を説明し、併せて、山腹で行なわれた特別観測の資料を生かして、山地斜面の気候の特性を鮮やかに描いている。次に気流の乱れと雲の章では、先年BOACの航空機墜落事故で、一躍世の注目が注がれた乱気流について、気象研究所を中心に過去数年間続けられた研究の成果を巧みに織りまぜて、富士山の

気流と千変万化の雲の形を興味深く解説している。このほか、富士山における降水や雪氷、プロクセンの妖怪とセントエルモの火など、話題はつきない。おそらく、富士山の気象に余り関心を抱いたことのない気象研究者も、面白く読むことができるだろうし、また、山岳気象についての認識を新たにすることだろう。

単なる登山者の気象でない本格的な山岳気象の領域で富士山について、これだけのことが書かれたということは、大変素晴らしいことである。多年観測にあたった測候所の職員の辛苦も報いられるというべきだろう。

紙面の関係で、他の部分については触れないが、私自身は気象の部分以上に興味深く読んだ。おそらく、多くの読者にとっても一読に値する内容を持っていると思う。

（河村 武）